

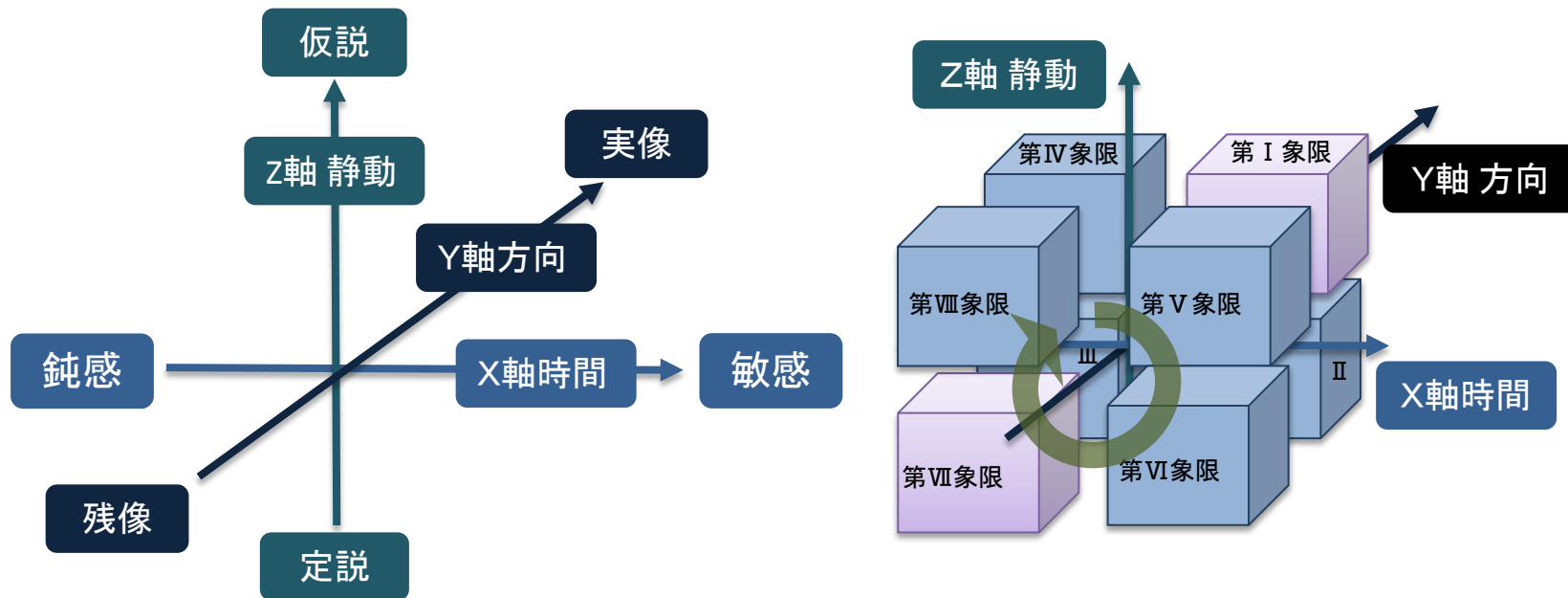
人文組織工学 A基礎理論

# 認識について



# 有効認識への変換

具象物と抽象物の認識がある。抽象の認識は知識に影響される。認識は行動、目的形成に影響する。発展する方向へ進むための認識を表した。



行動的認識と思索的認識、感覚的認識などがある。認識は外部からの刺激により起こるが、刺激そのモノが日常、非日常に分類される。日常の刺激は物量、目的と意識により変化する。認識によって反応がでないとき、図では原点に集まり受動的となる。

# 認識の軸

## 自らの認識と、その認識の効果を最大限に活かすための軸として設定

認識量は多い方が良いとした。多くを知り、多くを理解でき、適正理解の範囲が広がる。認識には整合性が不可欠である。矛盾するものにぶつかったとき、矛盾理由が分からねばならない。理由に対しての理解も必要である。

X軸

敏感と鈍感

Y軸

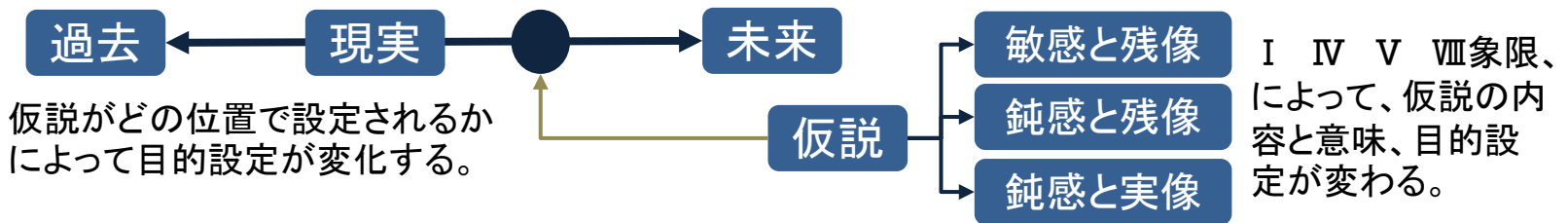
実像と残像

Z軸

仮説と定説

### 第I象限: 発展進化する《敏感・実像・仮説とする概念空間》

事物及び現象に対して、特に変化する事柄に対して、**敏感**に反応する。その対象は、**実像**でなければならない。**実像**は見た事柄だけでなく、その背景、前提を含めて実像とする。反応しただけではとどまらず、その結果、起こりえる事柄をロジックのある**仮説**としてとらえる。仮説を持ち得なければ、次に向かう方向は定められない。仮説を求める行為であってもよい。いずれ仮説を持てる。

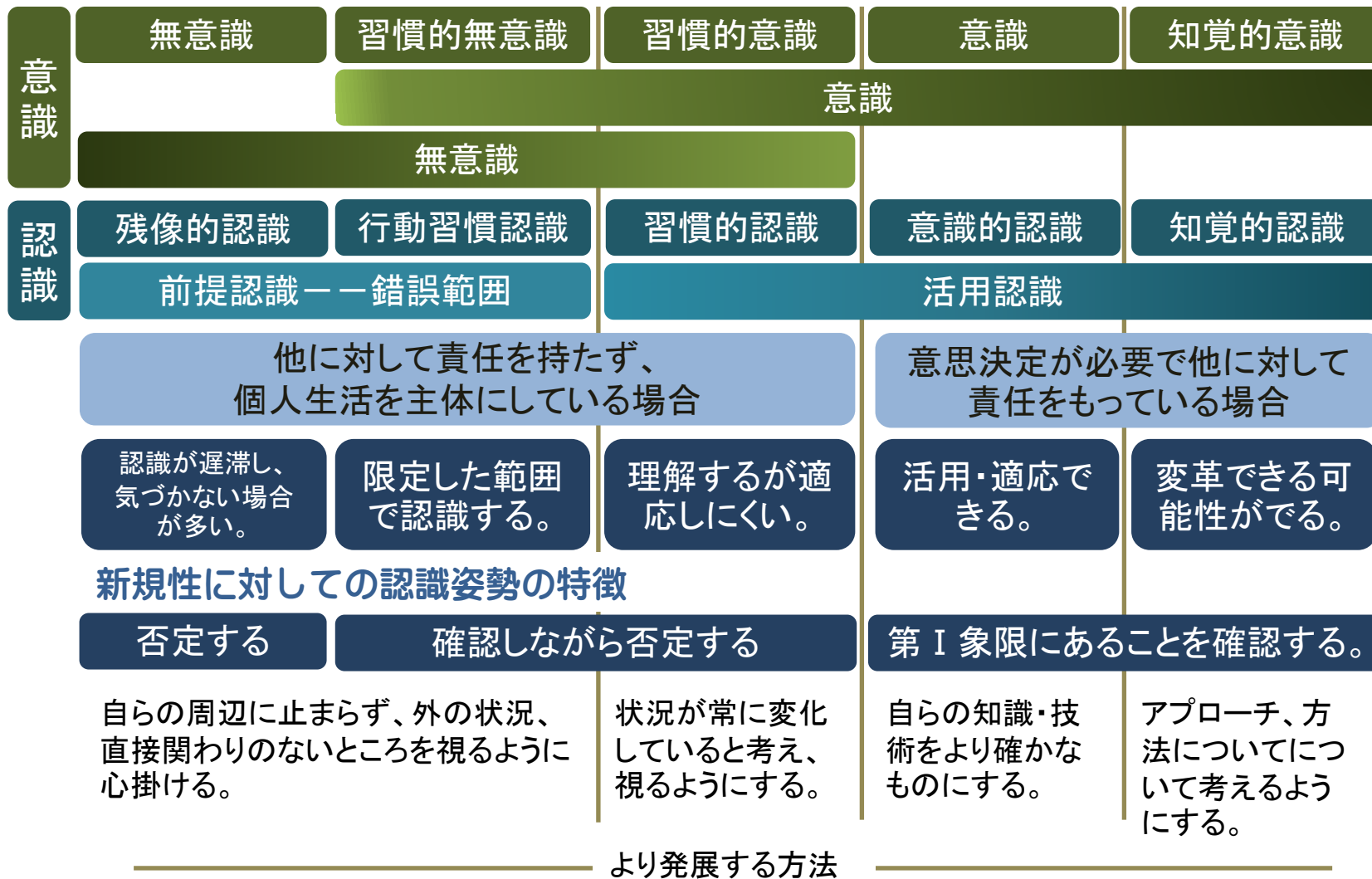


### 第VII象限: 後退の可能性がます。《鈍感・残像・定説とする概念空間》

鈍感にはタイミングがずれる。残像は背景、前提を見逃す。定説は過去の習慣、慣例に従ってしまう。後退はあっても進化はない。

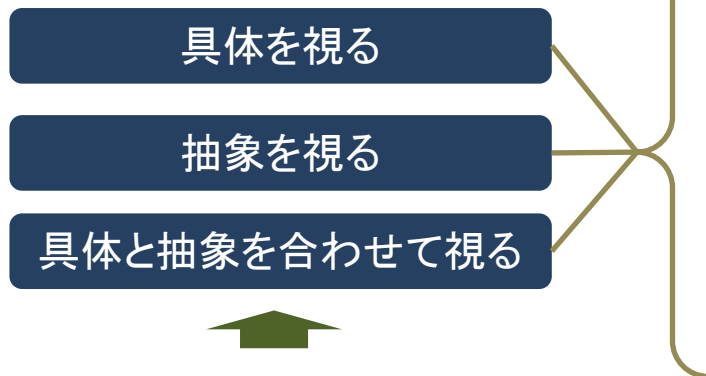
# 認識コントロール

自然に認識するものではなく、意識して認識する対象を持ち、範囲を広げていく。



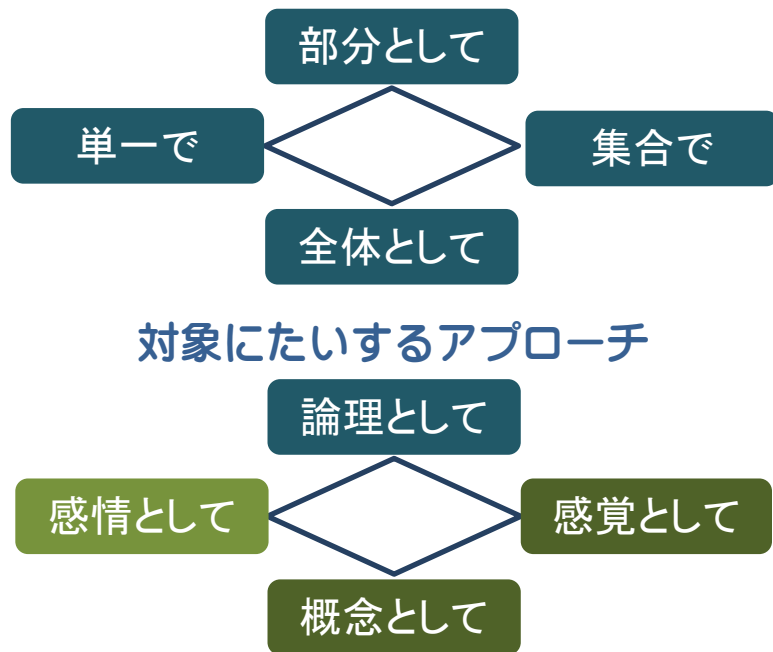
# 対象のとらえ方

対象が具体物ではなく、抽象物として考えなくてはならないモノが多くなった。



如何なる対象も、3種類の場合に分けて検証する。

## 対象のとらえ方



対象のとらえ方として、対象を部分として見る。そして、部分に対する全体は何かを自問する。単一、集合も同じである。単一で、集合で、部分として、全体として、をセットにして考えるようにする。

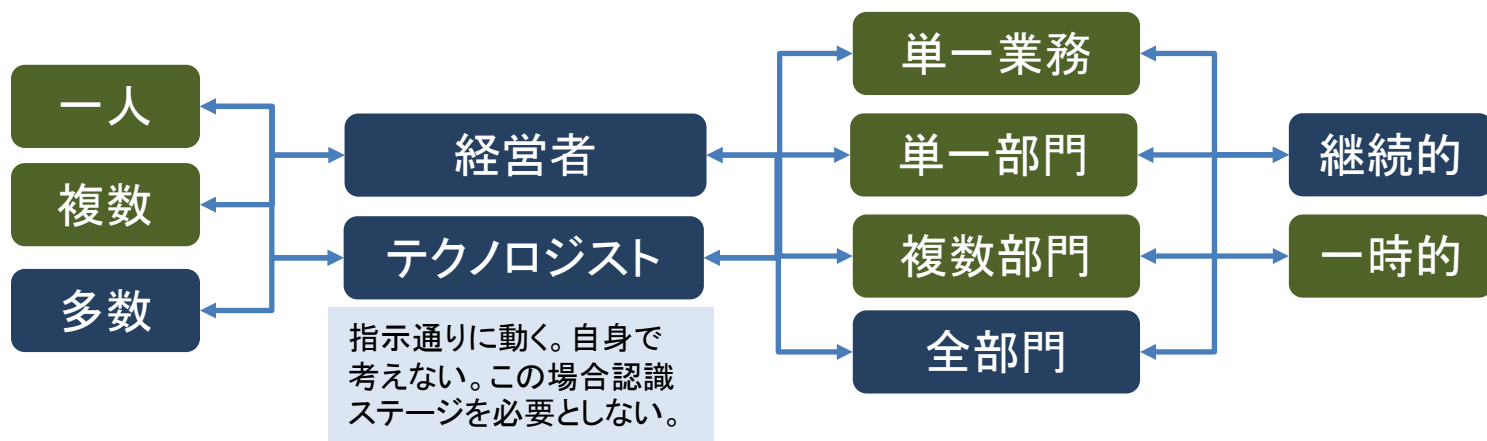
論理は感情に支配されてしまうことが多い。そのために最適にして最大に対象を見られなくなってしまう場合が多い。自身が認識する前提として、対象に対するアプローチを意識する。「好きである」「嫌いである」と言われてしまうと次へ進むことは不可能になる。

# 認識ステージ

おかれている立場によって認識対象、認識レベルが変化する。

責任は誰もが持っている。責任の範囲と程度が違ってくる。

だが、知識社会であり、機能社会であり、情報社会である今、誰もが自らの持ち場においての責任者である。それぞれの現場を、他の誰でもではなく、自らが一番理解している。



誰もが青枠の立場で認識する必要がある。

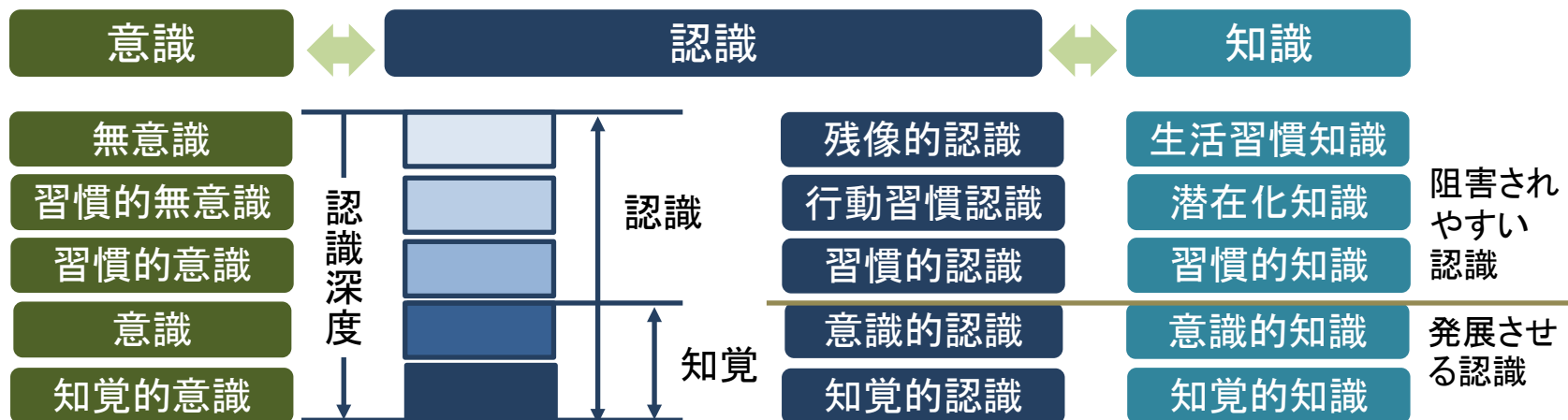
一人であって、テクノロジストで、単一業務で、一時的であっても、個人として業務をしているのであれば、経営者であり、継続する。一人であれば、大組織の全部門についての知識は最低量をもっていなければならない。

多くの場合、その時々に応じて、都合の良いステージで認識し、考えてしまう。

多人数の中において、経営者であり、テクノロジストであり、全部門から単一業務まで、継続的、一時的に関わらず、全領域を認識していなければならない。

# 認識深度

## 意識・認識・知識は互いに影響し合う



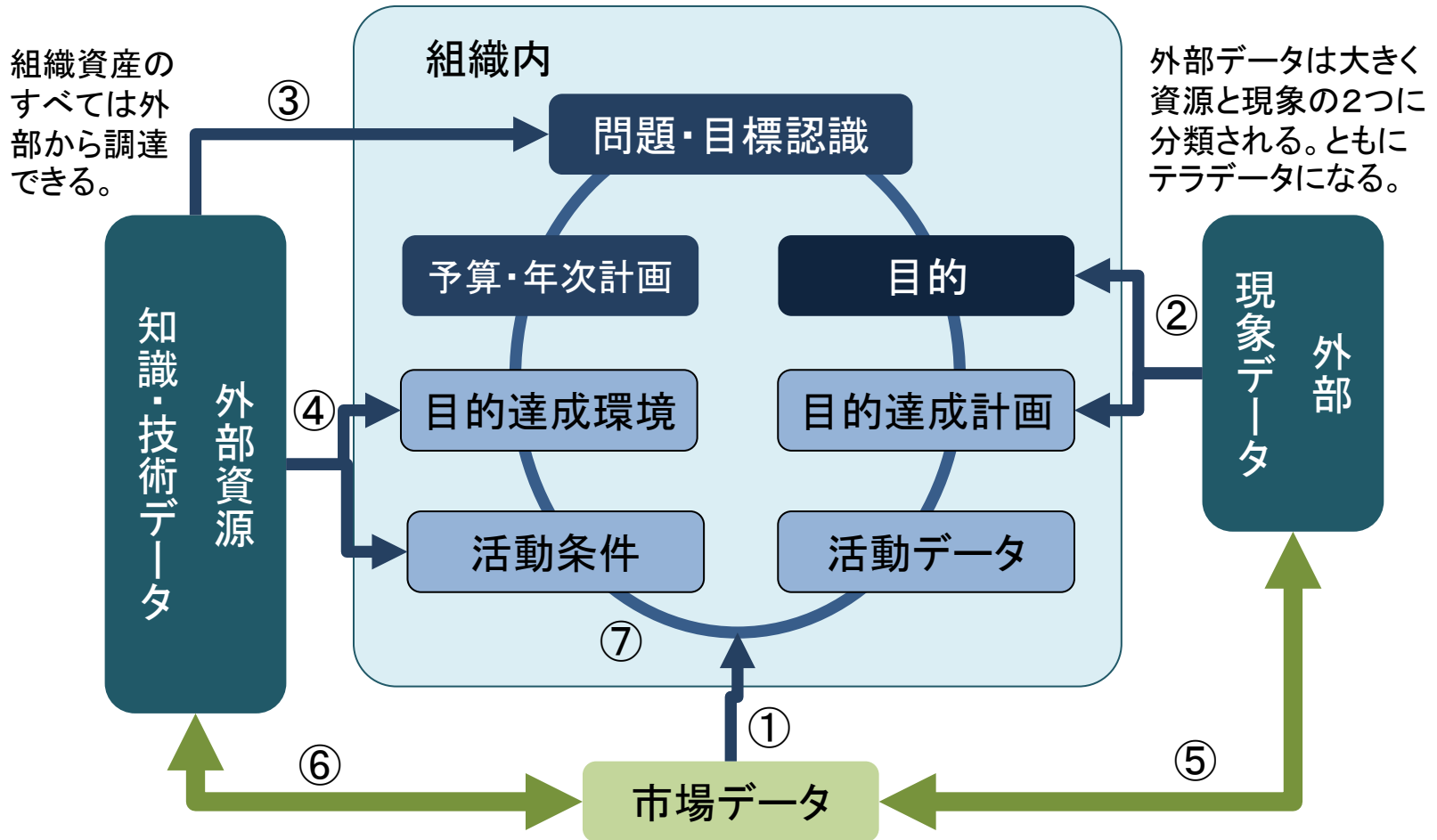
習慣的認識で、知覚的認識に至っていると考えられてしまうのが一番の問題である。科学は、習慣的認識を、ロジックで知覚的認識へと高めた。折角の知覚的認識を、習慣に影響される生活観で阻害されてはならない。



数で表したリアルを、現在と未来を含めて、言葉で表したバーチャルが認識深度を深めていく。

# 情報化認識の流れ

情報化認識は大きく7つの流れがある。すべてを視る必要がある。

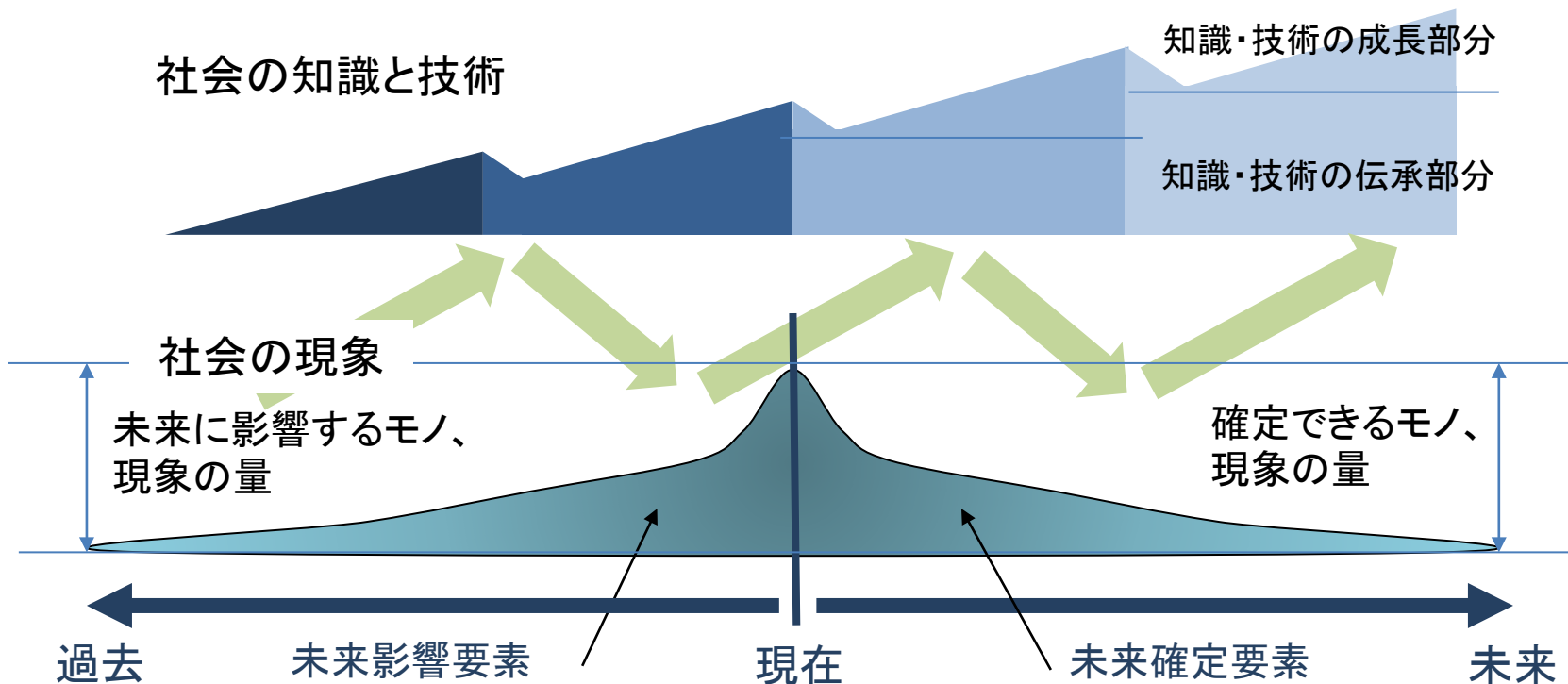


情報分析は①～⑦までのそれぞれについて行う必要がある。目的と取り扱うデータによってアウトプットは異なる。



# 既に起こっている未来を活用しよう

どれほどのモノを未来にもっていけるか。  
何をもって、未来に提案するか。



現象の中に既に確定している未来がある。